

1970年の改革案に伴って始まった美術学部の「総合基礎実技」は、2020年度に開設50年を迎える。70年代は「ガイダンス実技」と呼ばれていたこの特異な実技教育の全内容のデジタル・アーカイブ化をめざす本事業は、今年3年目を迎えた。作業は、授業のない後期に2人の非常勤講師、佃七緒と道廣明日香が進めた。対象は、課題などのカリキュラム、対応作品、学生名簿、その他関連資料である。予算上の理由から作業時間は1人当たり61時間以内と限られ、一日4時間としてせいぜい15回しか作業できない。これまでは原則的に水曜午後に行なっていたが、本年度から効率を高めるため、11月以降、一週間に2～3日連続勤務するフレキシブルな体制をとった。

現時点で、1976年を除く1970年から1977年までの全データ、および78年の課題作品のデジタル化が完了している。76年に関してはなぜかカリキュラムの記録が見つからない。記録の欠落や保管の不備は単なる不注意と言えるかもしれないが、多くの場合、それらを生み出す土壌がある。

1971年にデザイン科に入学した美術家の森村泰昌氏から、当時、ガイダンスは改革案の理想の体現として始まったばかりで、関わる教員たちにはたいへんな熱気があったと聞いた。だが、アーカイブ化の作業を通して、70年代半ば以降、大なり小なりカリキュラムの形骸化といえる側面が感じられる。改革案の理想主義的な工房制(図1)は、必要な施設整備の不可能性もあって、実現されることなく現実的な専攻制に座をゆずったが、その理由は理想を現実に落とし込むことの困難さにある。それは改革案具体化の象徴であるガイダンスに凝縮されている。

1973年度の本学美術教育研究会誌『美』39号で、3年間の実施をふまえて森本岩雄助教授と高井一郎助教授(共に当時)がガイダンスの理念と方法を述べている(註)。主なポイントを抜粋する。

(1) 改革案の完全実施は施設等の整備拡張なしに不可能だが、教員個々の熱意と組織改善で実現可能なものは実施された。ガイダンスはその一つ。

(2) 従来、学生は入学以前に専攻を決めなければならなかったが、ガイダンスを通じて自主的に自分の専攻を選択できるようになった。

(3) 従来、各科各専攻にはそれぞれ独自の基礎実技があったが、ガイダンス実技はそれとは別に、全新入生を対象とし、専攻への「案内」であると同時に、諸専攻に共通する基礎、「基礎以前の基礎」である。

(4) はじめは各専攻の基礎実技的な内容がそのまま持ち込まれることもあったが、「共通の基礎とは何か」が問われ始め、教員は「自己の専門的な研究・創造の体験を通して、あらゆる美術に共通する基礎実技教育そのものを創造」してゆくべきであるとされた。

(5) 基軸は、造形の幅広い視野に立つと同時に創造の原点に立ちかえること、自主性の伸長、発想や行為に重点をおく、柔軟な思考を生み出すための頭のトレーニング、材料体験など。

(6) 芸術教育の方法自身も創造的であるべきである。芸術創造のプロセスにもとづいた理念をもってカリキュラムを構成する(図2)。

(7) 担当教員もカリキュラムも固定せず、流動的な体制をとる。学科教員の講義を各課題に組み込む。

現在につながる仕組みが見られるが、これ以後のカリキュラムを見ると、図2の中の用語、「素材」「対象」「手段」「イメージ」「観念」「総合」などが概念的な枠組となって固定され、各課題は

その枠組内でのヴァリエーションになっていく。例えば、石や木、花や人間、版画やコラージュ、ランプシェードやパッケージ、最後に「総合」として集団での劇というふうに。既存の美術表現の中から概念や手段が選ばれる。システムティックになったと言えるが、それが逆に「基礎以前の基礎」を創造的に問い続ける姿勢の希薄化を導いたように思われる。

井上 明彦(美術学部教授)

註:森本岩雄「京都芸大の共通基礎教育-ガイダンス実技について」『美』39号, 1973年, pp.15-17

高井一郎「昭和48年度京都芸大共通ガイダンス実技教育について」同上, pp.18-22

(全文を以下の「総合基礎実技アーカイブ」のウェブサイトにて公開している。<http://w3.kcuu.ac.jp/~sogokiso/archive/>)